

キノコ記事コレクションと
古い1枚の新聞記事
(海岸林キノコ盛衰記)

腰野文男

fumio koshino

キノコに興味を持っているせいでしょうか、新聞に目を通してるといつしかキノコの記事が出てやしないかと探すくせがついてしまった。

それならいっそのこと目を通す機会のある、朝日、毎日、読売、千葉日報の4紙の中からキノコ関係の記事を探して見ようと決心し実行するようになってからもう7~8年になろうか。

日刊紙に出てくるキノコに関する記事は、他の項目にくらべてその数は本当に少ない。しかし長い間にはたまるもので厚さ3cm程の最初のファイルが一ぱいになり今は2冊目を使用している。千葉菌類談話会の行事として毎年開催されるキノコグッズの展示会にも日刊紙情報キノコとして出品しているのでご覧になった会員の皆様は記憶されている事でしょう。

初めは年度ごとに分類し整理していたが、今はよく出てくるオニフスベ・ニオウシメジ・バカマツタケ・ハツタケ(アカハツ)・マツタケなどの主な食用キノコやキノコ中毒の記事を別にして整理している。その成果については折りを見てまだ紹介したいと思うが、整理の際たまたま目にした1枚の古新聞に次のような当時の九十九里浜海岸林に出たキノコの盛衰を物語る興味ある記事が載っていた。

1984年(昭和59年)12月10日(月曜日)

毎日新聞房総週評欄

「キノコの盛衰」

九十九里南端の一宮町に出掛けて、ちょっと時期遅れのキノコ談義を聞く機会があった。

焼き鳥屋のおかみさんの安藤スエノさんは、町内では知られたキノコ採りの名人である。大

正8年生まれ、戦争中に東京の深川から疎開してきて、この松籟涛声の地に住みついた。彼女が懐かしむのは、上総一ノ宮駅から2キロほど南にある洞庭湖のまわりのマツ林でのキノコ採りだ。

「秋の彼岸過ぎ、モクセイの花が咲くと、キノコが盛りになるって言ってね。もんべに長靴、カマを持って。カゴで背負うほど採れたものよ。このあたりでノロリって呼んでいるシメジ、それにホウキタケ。おみおつけがおいしかった」

山のマツ林のキノコが採れなくなったのは、十数年前からのことだ。

「ほら煮炊きにも、おふろをわかすのにもマキを使わなくなったでしょ。山持ちの農家がハウス園芸で忙しかったり、勤めに出たりで山掃除をしなくなった。枯れ木もそのまま。草が茂り、落ち葉がたまり、キノコが消えちゃったのね」

スエノさんの話を、専門家に解説してもらうとすれば、次のようになるだろう。山のアカマツ林に出るホンシメジやホウキタケ、海岸砂丘のクロマツ林に生えるハツタケ、アミタケ、ショウロなどは木の根に付いて、土の中で生きている。だれもが電気やガス、灯油を使うようになった燃料革命で、マツ林にタキギを求める人がいなくなった。かん木が茂り、落ち葉が層をつくる。マツの根も、養分の多い落ち葉の層へ浮き上がってくる。そこでは、キノコの菌根は、力の強い微生物や虫に追い出されてしまう。周辺に住む人の生活の変化がマツ林の自然を変え、その結果、キノコが姿を消す。逆もまた真なり、とすれば、マツ林に入る人影が絶え

なければ、キノコは生き永らえることになる。それを裏付けるのが、三十年来、九十九里浜のクロマツの防風林の管理をしている長谷川三郎さんの話である。大正四年生まれ、一宮町東浪見の土地っ子だ。“もう二十五、六年も前でしたが、そのころは地引き網が盛んでしてね、ある日、浜に魚を分けてもらいに行ったが不漁で、空のバケツをさげて何の気なしにマツ林に入ったら、そこにハツタケ。そのうち、人が採りに行くようになり、いまじゃ耳から耳へと伝わりまして”入梅のころのアカハツタケ、秋のキシメジ、土地でアブチャチャというアマタケ、十月初旬の盛期には、暗いうちからキノコ採りの人たちが詰めかける。だれもが車で来る。毎年、

船橋からバスを仕立てて繰り込む常連もある。“秋のキノコは真夏の時分に湿りが少ないと具合が悪いらしく、今年はやっとダメでした。でも、減っているということはありません。キノコ採りの人たちが熊手のようなもので落ち葉をかく。あれでいいんでしょうかね”と長谷川さんは語った。植栽からの年数によるマツの若さであろうが、都会で暮らす人々の自然志向やモータリゼーションが、海岸砂丘のキノコの生命を保たせているようだ。マツ林を抜けると、初冬の九十九里の海の波音は高く、松に吹く風と天然のシンフォニを奏でていた。

毎日新聞千葉支局長 愛波健



inocolumn

キノコラム

聞き書き：須藤美智子 体験者：坂上貞子 紹介：小沼良子

ツキヨタケを食した話

皆様聞いて！むかしむかし30年前のこと。場所は神奈川県西丹沢の沢登り中、椎茸にそっくりのきのこが沢山採れました。家に帰り、お隣に半分差し上げて、私、パパ、3歳の娘は、薄く切ってお吸物にして食べました。匂いもなく、味もよくありませんでした。そして、夜寝てから吐き気におそわれ、娘と二人で、何回もトイレに通いました。パパはお酒を沢山飲んでいたせいでしょうか、大丈夫でぐーぐー寝てました。そしてトイレ行く途中、私は見たのです。台所の冷蔵庫の上、山積みきのこがぼーっと光を放っていたのです。「あっ」と息をのみ、気がついたので。すぐ百科事典で調べたところ、「月夜たけ」という毒

キノコだったのです。よく見ると、真ん中の軸のところが中心からずれています。すぐお隣に電話しました。お隣は明日食べるつもりで、塩水に浸してあるとのこと。一安心でした。こわいキノコの思い出です。

お茶のお稽古でご一緒の須藤さんが、「友人に光るキノコを食べて中毒した人がいる」とお稽古中に話して下さり、「ぜひ原稿を！」とお願いして、聞き書きしていただきました。ツキヨタケは味も香りもなく、気持ち悪くなって吐き気におそわれるんですね。暗闇では幻想的な光を放ちとても美しいのに。(小沼)